

# 思い出くるりん

[監修] くるり

夢の片隅で  
なんだかおぼろげな  
思い出のメロディー  
君はこの歌を少しだけ歌う

—「ブルー・ラヴァー・ブルー BLUE LOVER BLUE」

「くるり」という変な名前のバンドを結成して、もう何年経ったことだろう。

「超」が付くほど貧乏大学生だった当時の俺らは、「オシャレ」とか「ミュージック・ライフ」とか「青春」などは程遠い、まったくもってドラマにならないような毎日を送っていた。もしかすると、今も変わらず大したことはない日々を退屈に過ごしているのかもしれない。

人間は、都合のいいことばっかり思い出すようにうまくこと出  
来てるけど、辛い思い出もいっぱいあったりするのだ。でも、そ  
んなことはどうだっていい。人生は転がる岩のようなものなので、  
途中下車はできないのだ。その時のベストを、尽くす。旅に出る  
理由なんて何ひとつなかったのに、実は百個くらいあったことに  
気付いたりもするのだ。俺らは、それを音楽にする生活をしばら

く送っている。

音楽は最高だ。

新しい彼女がきたらサイコー（愛し合ってるその瞬間サイ  
コー）。バイトの給料が出たときサイコー（新曲がオリコンのトッ  
プ10に入ったときサイコー）。給料日あとのご馳走サイコー（風  
呂上がりのビールサイコー）。でも、ダントツで最高のものはひ  
とつだけ。新曲作ってスタジオに持って行って、メンバーと一緒  
に合わせて音楽が産声を上げるあの瞬間になうものには、いま  
だに出会ったことがない。あの瞬間のために、生きている気がす  
る。

はつきり言つて……。

くるりのメンバーである俺や佐藤や、かつてのメンバーたちは、  
なんてことないただのミュージシャンだ（凄く奴もいたけど  
……）。ついでに言っておくと、今まで世に残してきたたくさん

の楽曲も、なんてことないただのロックンロールだ（ブルースなのかもしれない……）。

でも、何かをキャッチすることって、やっぱり凄いなだぜー!!!  
何かをキャッチしないと、曲は作れない。そして、曲をハートでキャッチしないと、音楽を聴いても意味がない。

俺らが、なんてことないきっかけで、なんてことないテーマを楽曲にしたその瞬間は、明らかに超フライン・プレーのダイビング・キャッチだったわけだ。この本の著者である、くるりを愛してくれている（愛してくれていた）人たちも、なんてことないきっかけで、なんてことない生活の中で、くるりの楽曲をダイビング・キャッチしてくれたわけだ。

今まで何曲くらい、書いたのだろう。

世に出ているものも出ていないものも含めて、まるで呼吸する

かのように今まで曲を書いてきた。これからも、息の続く限り、曲を書き続けるのだろう。あと何曲くらい書けるかなあ。

この本は、いろんな人が止めておいた思い出たちが、くるりんと転がり出す、そんな本です。

くるり  
岸田繁



東京 (きよならストレンジャー)

## 「君とつまく話せるかな」

先日高校を卒業しました。岐阜のど田舎から東京に進学します。高校で出会った最高の友達と離ればなれになって、音楽を通じて知り合ったたくさんの人たちには二度と会えないかもしれません。そして実家をでます。東京は自分にぴったりの歌で、そして私は東京は恋人とかの歌ではなく親の歌だと思っています。私は未だに反抗期をしていて、なかなか親には素直になれません。親には絶対涙も見せたくないです。親に感情を見られるのが恥ずかしいです。君とつまく話せるかな、ほんとは感謝しとるのに、意地はつか張ってごめんな。東京いって、たくさん勉強して、たくさん恋して、たくさん音楽に出会って、もっと大きな人になって帰ってくるで。18年間もありがとつ。旅立つ日、この言葉がちゃんとと言えますように。

(チルキー・女・18才)



ハイウエイ (ハイウエイ [Maxi])

## 「母のハイウエイ」

「久々に凄いロックバンドが出てきた!」。10年以上も前、下手したら僕が小学校にも入らない頃、ロックが大好きな母親が興奮気味に話していた事を今でも忘れない。そのバンドの名は「くるり」。その影響から当たり前というように僕もくるりが大好きになった。それから月日はたち、この春から僕はイギリスへ留学する事が決まった。去年の夏、留学を反対していた母と大ゲンカになり、全く口をきいていない時期があった。でも、母は次第に僕の努力を認めてくれたのだらう。急に母に呼ばれリビングに降りると、アコースティックギターを抱えた母が「ハイウエイ」を弾き語り始めた。イギリスへのGOサインだった。僕はこんな歳になっただけ、涙を流さずにはいられなかった。僕は異国の地で精一杯やろうと思ってる。「きつとでつかいことしてやるつ」と。つらい時には母の「ハイウエイ」を思い出しながら。

(こつた・男・18才)

ばらの花 (TEAM ROCK)

## 「苦しかった修行時代」

私は今、自分の夢だった雑貨屋をはじめて4年目になります。まだ20代の前半の頃、雑貨屋さんをしたいという目標を抱きつつ、大手雑貨屋さんでアルバイトとして働き、修行をしていました。先の見えない自分の将来について、悶々としている日々を過ごし、また職場では人間関係があまりうまくいかず、かなり辛い思いで過ごす毎日でした。当時からくるりのファンで、通勤電車の中ではテンションをあげるため、爆音でよく、くるりを聞いていました。自分の夢の為に、これは試練なんだと思ひ、辛い思いをしながらも、毎日毎日職場に通ってました。ある日ヘルプで支店のお店に行くように言われ、たまたまそのお店に行ったときのことです。閉店作業中、店内でFMが流れてて、その時に「ばらの花」がかかりました。新曲だったばらの花を初めて耳にし、切なく美しいメロディーに、心を打たれて、泣きそうになりました。くるりが、がんばれ！と言ってくれているような、そんな気がしたので。あれから7年。私は独立し、念願の自分のお店をもちましたが、今でも、ばらの花を聞く度、あのとき聞いた時の情景・状況が思い出されて、泣きそうになります。そして、初心忘れるべからず、と自分に言い聞かせます。素敵な曲がありがとう、くるり。今日もさらなる夢に向かって、走り続けます。

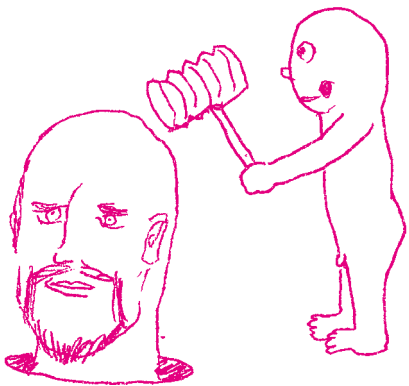
(あんこまん・女・33才)

Baby I Love You (NIKKI)

## 「くるりの歌詞で仲直り」

カラオケで、いつもごめんね 今  
日もごめんね、て歌う時に、こっ  
ちむいてヘコって頭さげてきた。  
単純やけどめっちゃ嬉しかった。

(こつえ・女・22才)



J  
E  
S  
U  
S



春風 (春風 [MAX])

## 「私に見える春風」

私の職場は、この3月で閉校になる小学校です。山の中にある学校です。春は色とりどりの花、夏は山の緑、秋は紅葉がきれいでした。そして冬、言葉が無くなるぐらいに美しい雪景色。そんなすばらしい自然に、くるりの音楽は見事に調和していました。美しい自然の中、くるりの音楽を聴きながらの通勤は、飽きることがなかったです。3月に入り暖かい日が続き、沿道の雪がだんだん溶けてきました。春が来るのはうれしいけれど、でも、とても寂しいです。「遠く汽車の窓辺からは春風も見えらるでしょう」。popの「春風」には、弦楽器の音がまるで春風のように入っています。4月になると無くなってしまいうちに吹く、春風。この弦楽器の音に、そんな風景を重ねてしまいます。これから「春風」を聴くたびに、私は思い出のつまった学校と美しい自然を思い出し、きっと、少し切ない気持ちになるのだと思います。

(きま・女・26才)



ジュブリー JUBILEE (ワルツを踊れ Tanz Walzer)

## 「ジュブリー」

考えても考えても仕方のない悩みを抱えて、2007年の夏、生まれ育った日本を離れることにした。ヨーロッパのある小さな町で、新しい日々慣れずに自分なりに汗をかいていた中、一人のひとに巡りあった。同じ時期に、くるりのアルバムが発売された。アルバムは彼の故郷で録音されたものだ知った。彼を想うとき、彼と過ごすとき、ずっと「Jubilee」を聞いていた。彼の故郷で冬休みを一緒に過ごすことになった。07年から08年に変わる時、新年を祝ってラジオから流れた「ワルツ」。私がいつもくるりを聴いていることを知っている彼が笑って、「ワルツを踊ろう」と私の手を取った。「君がいつも聞いているアルバムのタイトルでしょ」。オーストリアの町並みと、彼との思い出と、くるりの音が重なる。今の彼とどうなるか、先のことは分からない。幸せを感じる分だけ、不安も大きい。ただ、どんなことが起こっても、別れに泣いて、また新しい出会いに笑う。泣いて、その分、笑って。それを繰り返していくんだろう。それが「生きる」ことなのかもしれないと思った。Juliee 飲むとは誰かが去るかなしみを胸に抱きながらあふれた一粒の雫なんだろう。

(nacaco・女・28才)